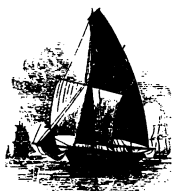


## 「聖俗」のあいだで

— ダンテにおけるラテン語と母語

浦 一章 (いしかずあ)

一三〇一四世紀のイタリアでは、話し言葉はロマンス系の俗語、書き言葉は俗語と伝統的なラテン語が併存するという言語状況が生じていた。この過渡期に生きたダンテの作品に、言語の重層状況がどのように反映しているのか。



ギリシャ文学を手本として、洗練されたラテン文学の創作が模索されていた頃、(おそらく紀元前三世紀半ばには)すでに話し言葉としてのラテン語と書き言葉としてのラテン語は分化しつつあったことであろう。ギリシャ語を解しその文学を模倣しうる教養人、文化的エリートと教育の恩恵に与らない一般大衆の距離は、マスメディアをもたない古代の方が、現代よりも大きかったかもしれない。文語ラテンの変化が比較的小さかったのに対して、口語ラテンは大きく変貌を遂げ、やがてロマンス系諸語を生みだすに至る。

この変化は長期にわたり緩やかに進行し、もはやラテン語ではなく独自の言語と見なすべきものが成立するのは、イタ

リアの場合一〇世紀中葉だとされている。九六〇年三月の日付がある「カプアの証文」(Plactio di Capua)はモンテカッシーノの修道院所領に関するラテン語の法的文書であるが、関係者の証言のみは語られたままの形で引用されている。この引用文こそイタリアにおけるロマンス系「俗語」の最古のものとしてとされている。「俗語」とは本来無学な大衆の言葉であり、当初は話し言葉として文語ラテンと対置されるものであったが、近代語への推移の過程で「俗語」も独自の文学を生みだし、洗練された文章語としての側面をもつようになる。イタリアの場合「俗語文学」が成立するのは、一三世紀すなわちダンテ(二六五—三二)の世紀である。「俗語」によ

るイタリアの標準的書き言葉を確立するのに、もちろんダンテは大きく貢献した作家ではあったが、その傍らには文語ラテンが(宗教の言葉、学問の言葉として)依然威光を放ちながら存在していた。事情はペトルルカ(二四七—五)やボツカッチョ(二二七—三七五)の場合も同じであり、これら三大作家はいずれも「俗語」のみならず、ラテン語でも著述活動を展開した。本稿の目的は、ダンテにおけるラテン語と「俗語」の関係を見ることである。

## — 奇妙な状況——『饗宴』と『俗語詩論』をめぐる

一三〇一年の政変でフィレンツェを追われたダンテは、ほぼ同時期(二三四—〇七年頃)に『饗宴』および『俗語詩論』という、ともに未完で終わった二作品の執筆にとり組んだ。『俗語』で書かれた『饗宴』は、カンツォーネ形式の韻文作品への註釈を通じて、さまざまな分野の知識の広範な普及を目指した作品であった。これに対して、ラテン語で書かれた『俗語詩論』は、かつては邦題として『俗語論』が用いられてきた書物であるが、言語の起源から始めて「俗語」によるさまざまな表現技法を扱うことを目指した作品であった。この表現技法を扱った部分は、実際には、カンツォーネの詠み

方を論じ終わる前に中断してしまっただが、『俗語詩論』の第一巻第一章でダンテは「俗語」とは子供が音声を分節化し始める第一段階で、自分の周囲にいる者たち(とりわけ乳母)から自然に習得する言葉だと定義している。これに対して、ラテン語は熱心に長時間学習することによって、辛うじて少数者のみがマスターしうる第二段階の言葉である。「俗語」が大部分無意識的に獲得されるのに対して、ラテン語は「文法」を意識的に努力して学ばねばならない言語なのである。

「文法」(Grammatica)とは語源的には文字を書く際の技術、すなわち文章語の規則を意味するが、ある種の状況下では「文法」が「ラテン語(学習)」の代名詞となりうることは容易に想像できよう。ダンテも(時にラテン語を話すことがあったにせよ基本的には)そのような状況下で暮らしていたと考えられるが、『俗語詩論』の同箇所ではラテン語が「人為的」(artificialis)な言語であるのに対して、「俗語」は(時代と場所に依りて)さまざまな形態をとりうるが、すべての人間に「自然的」(naturalis)なものであるがゆえに、ラテン語に比して「より高貴」(nobilior)な言葉だとされている。『俗語詩論』の主題はしたがって「より高貴な俗語」のほすであるが、この書物がラテン語で執筆されてい

る事実はダンテの意図と奇妙に矛盾することにはなるまいか。ダンテ自らが述べているように、ラテン語の習得に到達する者が少数であるならば、『俗語詩論』が読者として想定しているのはラテン語の知識をもたない大多数者いわゆる大衆ではなく、『俗語』と『文法』の両方を具えた少数の文化的エリートということになる。

実際、韻文の最高形式たるカンツォーネに適合した卓越した構文を学ぶためには、ウェルギリウス、(『変身物語』の)という限定が付された)オウィディウス、スタティウス、ルカヌスなどの詩人、リウィウス、プリニウス、フロンティヌス、パウルス・オロシウスなどの散文作家の実例に親しむことが推奨されている(『俗語詩論』第2巻第6章)。キケロの名前が挙げられていないことは今日の視点からすると奇異であるが、『俗語』による詩作の際にもラテン語の教養をダンテが重視していたことは明白であろう。だが、このことはラテン語の「俗語」に対する文化的優位、「人為」の「自然」に対する卓越を承認することにほかなるまい(あたかも、門前払いしたラテン語を裏口から招き入れるような有様である)。それゆえ、『饗宴』第1巻第5章において、今度は(1)時をもたらず変化に対する安定度、(2)表現力の豊かさ、(3)諸部

分の調和から生みだされる美しさの観点から、ラテン語が「俗語」より卓越しているとされているとしても、『俗語詩論』との大きな矛盾にはなるまい。(1)および(3)はラテン語が整備された「文法」をもつことと密接に関係しているが、ダンテはとくに(1)を「高貴さ」(nobilitas)という用語で表わそうとしている。(2)はまさしくラテン語の文化的蓄積の厚さに由来する事柄であり、ダンテはこの言語の恩恵に与らない読者層のために「俗語」で『饗宴』を執筆し、知識伝達の具としての「俗語」を「新たな光明、新たな太陽」(第1巻第13章)に高めることを意図していたが、『俗語詩論』の場合とは逆に、『饗宴』ではラテン語すなわち「人為」の優位が真正面から受け容れられているわけである。

## 二 古典ラテン詩人たち——『キタ・ノワ』から『神曲』へ

長母音と短母音を一定のパターンで組合わせたものを単位として、これをさらに規則的に配列するというラテン語の詩法は、母音の長短が曖昧となった「俗語」ではもはや実践しえないものとなったが、行末で踏まれる韻が「俗語」の詩の標識的特徴となった。言語構造のこうした大きな変化にもかかわらず、ダンテはラテン詩人らを「俗語」による詩の指針

としようとする。『キタ・ノワ』(ラテン語による原題 Vita Novaを、キリスト教的な意味合いが強い『新生』とはせず、あえて音訳しておく)第25章で、ダンテは修辭の技法の使用に触れて次のように述べている。

さて、『古典古代のラテン』詩人に対しては、散文作家に対する以上に、より大きな表現の自由があたえられており、韻を踏みながら詩を詠む者たちは俗語詩人に他ならない。それゆえ俗語詩人に対しては、他の俗語作家に對する以上に、より大きな表現の自由を与えるのが相応しいことであり、また理にかなったことでもある。したがって、何か修辭的な文彩や裝飾が詩人に対して認められるなら、俗語の韻文作家にもやはり認められることになる。もし詩人たちが無生物に対して、あたかも感覚と理性を具えているかのように、語りかけたりあるいは互いに話しあわせたりしているならば、俗語の韻文作家が同じことをするのは相応しい。……しかしながら、精緻に考えない者が増長しないように、次のように言い添えておく。詩人たちは理由もなく修辭を用いて書いたわけではなかったし、俗語の韻文作家たちも自ら歌うこと

について、心の中で考察を加えたのでなければ、修辭を用いるべきではない。修辭的な文彩や裝飾を着せて韻文を書きながら、後になって訊ねられると、自分のことがでから修辭の衣を脱がせ、ほんとうの意味を示すことができないうならば、そのような者には大きな恥辱がある。

引用文の後半部は修辭の濫用を戒める中味となっているが、ラテン語の古典詩人に関する文は事実を表わす形式で書かれているのに対して、俗語の韻文作家に関する部分は義務を表わす形式で書かれており、ラテン詩人らに与えられた規範的価値を明確に物語っている。25章での議論の発端となったのは擬人法であるが、ダンテはウェルギリウス、ルカヌス、ホラティウス、オウィディウスから実例を引くことによって、俗語詩人による擬人法の使用を正当化している。注目しておきたいのは、このリストが前出『俗語詩論』のものと、詩人にかかわる部分では、基本的に同じだという点である。ダンテはやがて『神曲』においてあの世巡りの旅を企てることになるが、リンボと呼ばれる地獄の外縁部分(有徳の異教徒や洗礼を受けずに亡くなった子供たちの霊にあてられている)で、ウェルギリウスに導かれる旅人はホメロス、ホ

ラティウス、オウィディウス、ルカヌスに迎えられ、栄えある詩人たちの六番目の者として遇される（『地獄篇』第4歌79行目以下）。ギリシャ語を知らなかったダンテはホメロスを直接は読んでいないこと、密かに改宗してキリスト教徒になったものと考えられていたスタティウスが煉獄に配されていること（『煉獄篇』第21歌以降）を考慮すれば、ダンテが指針として仰ぐラテン詩人はほぼ常に一貫しているのである。そうしたラテン詩人らに対し、ダンテはどのような総合的理解を有していたのであろうか。ウエルギリウスの場合にとくに注目してみよう。

### 三 ダンテとペトラルカを分ける一世代

古代の詩人たちと同等に扱われるという、ダンテが作品の中でのみ自らに施した名譽を、ペトラルカは一三四一年カピトリウム（ローマ）で桂冠を受けた時に現実に獲得したと言えるかもしれない（もともと、ペトラルカの名譽を担うはずであったラテン語叙事詩『アフリカ』Africaは未完のまま終わり、『アフリカ』への一種の註釈となるはずだったやはりラテン語による『偉人伝』*De viris illustribus*も未完に終わった）。ダンテはウエルギリウスに対して「自分に名譽

をもたらした美しい文体を私が学んだのは、ただあなたからです」（『地獄篇』第1歌85-86行）と告白することによって、ウエルギリウスのすぐれた詩人としての側面に触れる。だが、ダンテのウエルギリウス理解はこの側面にのみ限定されていたわけではない。ローマ皇帝の基礎と役割を論じる際には、『饗宴』（第4巻第4章）においても『帝政論』（第2巻第3章など随所）においても、『アエネイス』が自説を支える論拠として引用され、真理を宿した聖典あるいは学問的な「權威」を具えた作品として扱われている。また、スタティウスの改宗に関しては、ウエルギリウスの『牧歌』第4歌5-7行が導きとなったことが述べられている（『煉獄篇』第22歌70-72行）。「時代の大きな秩序が新たに生まれ、乙女（『正義』が帰りサトゥルヌスの御世が戻ってくる。高き天より新たな子孫が降臨する）」という、『牧歌』の一節は、中世ではキリストの降誕を予言したものと理解されていたのだが、こうしたさまざまな要素を考慮に入れなければ、ウエルギリウスが地獄、煉獄の案内人選ばれた理由、ひいてはこの登場人物にこめられた意味も十全には理解しえない。

これに対して、ペトラルカが所蔵したウエルギリウス写本（ラウラの死に触れた書き込みのあるこの写本は、現在ミラ

ノ、アンブロジーアーナ図書館が所蔵）にはセルウィウスによる中世期の註釈も含まれているが、ペトラルカはウエルギリウスの中に政治的なメッセージを求めない。ペトラルカにとつて、ウエルギリウスは純正な古典ラテン語に回帰する際に、キケロとともに参照すべきモデルであった。ペトラルカは古典作家ら（とりわけリウィウス）に対して諸写本の比較と本文校訂という文献学的方法で接した。そのような方法は、歴史的な距離に関する正しい認識、深い言語学的知識、研ぎ澄まされた批判精神などを必要とするが、やがてペトラルカの方法は（コンスタンティヌス帝から教会への寄進状が言語学的に偽書であることを証明した）ロレンツォ・ヴァッラや（フリニウスの校訂にとり組んだ）エルモラーオ・バルバロ、（すぐれた「俗語」詩人でもあった）ポリツィアーノ、（ウエルギリウスの校訂にとり組んだ）ピエーロ・ヴァレリアーノによって引き継がれ、より精緻なものへと高められてゆく。それゆえにペトラルカの旅は写本探索と無縁ではなかった。

象徴的なのは、同じヴェローナに滞在しながら、ダンテはいかなる写本の発見にも寄与しなかったが、ペトラルカはアッティクス宛書簡などキケロの文書を容易に発掘したという

事実であらう。流浪の身となったダンテは貧困ゆえに研究に打ち込むだけの余裕がなかったのに対して、経済的に安定していたペトラルカにはそれが可能だったのであろうか。ダンテを庇護したスカラ家の仲介に頼れば、ペトラルカが発掘を行なったのと同じ大聖堂の書庫にダンテも支障なく接近しえたであらう。ダンテがそうした接近を行なわなかったのは、それゆえむしろ写本探索に対する関心の欠如のせいだと考えられる。それに、ダンテにとつては、『神曲』の完成の方が急務であったのであろう。ダンテもペトラルカも羅俗の言語併存状態を生きた（それにしても、南仏アヴィニョンの教皇庁に出入りしていた時代も含めて、ペトラルカは日常生活の必要を何語で満たしていたのであろうか。奇妙な事実。ペトラルカの「俗語」散文がほとんど伝わっていないということである）。だが、二人を分ける一世代は大きな変化の生じた一世代なのである。この変化はやがて人文主義の名で呼ばれることとなるが、これに対するダンテの貢献はわずかにラテン語で晩年詠まれた『牧歌』（Egloge）だけと言ってよからう。

（東京大学文学部／イタリア文学）